

2023年11月19日 久宝教会 礼拝メッセージ

「日毎の糧 命のパン」

牛田匡牧師

聖書 出エジプト記 2章 1-15節

先日11月15日は「七五三」ということで、晴れ着を着た着物姿の子どもたちの姿があちらこちらで見かけられました。11月には各地の保育園でも「愛児祝福式」の行事があります。その中で私が保育園の子どもたちに「みんなはどうやってこんなに大きくなったんだろう」と問いかけると、子どもたちは元気よく「しっかりご飯を食べているから」とか、「いっぱい寝るから」とか、それぞれに考えた答えを口々に教えてくれます。毎日食事をとり、身体を動かし、しっかりと睡眠をとること。どれも心身の成長にとっては欠かすことの出来ない大切なことですし、そもそもこの命を維持していくことに不可欠な事柄です。

保育園の子どもたちがそれらの「当たり前」をしっかりと答えてくれる一方で、同じ時に、同じ世界で、次々と傷つけられ奪われている命があること、わずかな食糧を得ることも出来ず、安心して身体を横たえることすら出来ない人たちがいることを思うと、胸が痛みます。そしてそれらは遠くの戦争をしている国々の人々だけではなく、私たちの身近な所でも貧困のため、病いのため、また差別のため等、様々な事情から、そのような状況に置かれている方々もおられることと思います。必要とされている方々に、必要な支援が届けられるように、私たちに出来ることをさせて頂きたい、そのように用いられて行きたいと願っています。

「今日のパンを与えて下さい」「日毎の糧を与えて下さい」とは、「主の祈り」の中でも唱えられている通り、どこの国や地域でも昔から人々の切実な願いでした。「主の祈り」は、イエス様が「神様にお祈りする時には、このようにお祈りしなさい」と言って、人々に教えられたということで「主の祈り」と呼ばれています(マタイ 6:7-13 並行)。その中で「必要な糧を、今日与えて下さい」と言われているのは、つまり「明日も明後日もこれからもずっと毎日与えて下さい」という将来のことを言っているのではなく、「今日食べるものがない」という切実な願い、逼迫した状況が人々の目に前に現実としてあったということの裏返しでした。

イエス様が話されるお話に耳を傾けていた古代イスラエルの人々にとって、今日食べる物が何もないという状況の中で、天の神様から食べ物を与えられた物語

としてすぐに思い出されたのは、大昔から語り継がれて来た出エジプトの際の「マナの物語」でした（出エジプト記 16 章）。古代イスラエル人のリーダーであったモーセに率いられて、60 万人以上（出エジプト記 12:37）の人々がエジプトから脱出しましたが、持ち出してきた食糧はすぐに底をついてしまいました。そこで人々はリーダーであったモーセとその兄弟アロンに文句を言いました。そして、その人々の不平を聞かれた神は、人々に毎日天からのパンとして「マナ」と呼ばれる食べ物を与え、人々は決して飢えることはなかった、という物語です。

「出エジプト記」を読むと、モーセは数々の奇蹟を行っています。エジプトの国から解放されるように、エジプト人に対して様々な災いを起こしていますし（7-12 章）、最も有名なのは葦の海を割ってエジプト軍の追っ手から逃れた「モーセの海割り」の場面（14 章）ではないかと思います。そのような数々のすごい奇蹟を起こしたモーセのように、奇蹟を起こして今日のパンを与えて下さいと願う人々に対して、イエス様は言われました。「ヨハネによる福音書」6 章 32 節です。「モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではない。私の父が天からのまことのパンをお与えになる」のだ。モーセが特別な指導者だったから、人々に天からのパンであるマナを与えることが出来たのではない、人々の必要を満ち、その命を支えたのは、天の神様によるのだ、ということです。

私たちは、スポーツ競技を観たり、手品やサーカスなどのショーを観たりすると、自分には出来ないこと、普通では出来ないことをやって見せてくれるその相手の方のことを、素直にすごいと思いますし、またそのようなプレーや演技ができるようになるまでに、どれだけの練習や修業を重ねられて来たのかと想像します。また親子で達人であったりすると、修練だけではなく、遺伝の要素も大きいのではないかとも思ったりもします。しかし、そのように考えている時、私たちは単に眺めているだけの観客になり、また与えられるのを待っているだけの受け取り手になってしまっていないでしょうか。イエス様が言われたように、「日毎の糧、命のパンを与えて下さい」と祈る時、私たちは単に願い求めればよいだけなのではないでしょうか。どうも聖書が語っていることは違うようです。

今回の聖書のお話は、様々な奇蹟を起こし、何十万人という古代イスラエルの民を、エジプトから導き出した指導者、モーセの生い立ちのお話でした。彼は偉大な

指導者にふさわしい特別な生まれ方かという、むしろその逆でした。「出エジプト記」の 1 章には、エジプト王ファラオが国の中で増え続ける古代イスラエルの民を邪魔に思い、男の子が生まれるとナイル川に投げ込んで殺してしまうように命じたと書かれています。そのように緊迫した状況の中でモーセは誕生し、殺されないように家族によって三カ月間隠されていました。しかし、いよいよ隠しきれなくなったので、籠に入れてナイル川のほとりに置かれた所、無事にファラオの娘に発見されて引き取られ、ファラオの娘の息子として育てられることになりました。しかも、自分の実母が乳母として雇われたというのですから、モーセの姉であった少女の機転や知恵は見事なものです。

何はともあれ、モーセはファラオの娘の下で大きくなっていきましたが、自分自身がエジプト人ではなく、ヘブライ人であるという自覚は強くあったようです。そのためある日、仲間のヘブライ人がエジプト人から打たれているのを見るに見かねて、相手のエジプト人を殺してしまいました。しかも、それによって仲間から感謝されるどころか、他のヘブライ人からも「あのエジプト人を殺したように、私を殺そうというのか」と疑わしく思われるようになってしまい、エジプト人殺しの<sup>かど</sup>廉でファラオから追われる身となり、エジプトを離れ、遠くミデヤンの地まで逃げて、隠れて生活をする身となりました。

隠れて逃亡生活を送っていた犯罪者であったモーセですが、神様はそんなモーセを出エジプトの指導者として選ばれました。しかも、彼は特別に口が雄弁だったわけでもありませんでした。神様から呼びかけられ、召命を受けた時「私は雄弁ではありません。私は本当に口の重い者、舌の重い者です」(出エジプト記 4:10)と言い、「どうか他の人をお遣わしてください」(13)とすら言っていました。さらに、その時既に 80 歳の高齢者でもあったようです(7:7)。神様はそのような非力なモーセを、民の指導者としてあえて選ばれ、用いられました。神様の目は常に世の強い者、力ある者、大きい者にではなく、弱くされている者、力を奪われている者、小さい者たちに注がれています。

「モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではない。私の父が天からのまことのパンをお与えにな」ったのだ(ヨハネ 6:32)と言われたイエス様は、続けて「私が命のパンである。私のもとに来る者は決して飢えることがなく、私を信じる

者は決して渴くことがない」と言われました。さらに「あなたがたの先祖は荒れ野でマナを食べたが、死んでしまった。しかし、天から降って来たパンを食べる者は死なない。私は、天から降って来た生けるパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」(49—51)とも言われました。イエス様が自身を犠牲にされても人々を大切にされたように、その裂かれたパンを食べ、自らの内に取り込み、イエス様の生き様や価値観を「他人事」としてではなく「自分事」として生きる時、私たちは単に天から与えられたパン、マナを自分の必要分だけ拾い集める生き方ではなく、自分が与えられて持っている物、5つのパンと2匹の魚(ヨハネ6:1—15)を、周囲の人々と分かち合う生き方へと導かれ、変えられて行くのだと思います。

生後間もない赤ん坊の間に、その命を奪われてもおかしくなかったモーセが、その命をファラオの娘によって拾い上げられこと、また実母や実姉に育てられたこと。大きくなってからも殺人犯として命を狙われながらも、逃亡生活で生きながらえたこと。そして神様によって何十万の同胞たちの解放のために召し出されたこと。それら全ては、一つ一つの小さな奇蹟、不思議な導きの積み重ねだったのではないかと思いますし、その末に出エジプトという大仕事が初めて成し遂げられたのだろうと思います。

そのような小さな奇蹟、神様が共にいて働いて下さっていると感じられる出来事は、今日を生かされている私たちの身近にもあるのだと思います。今日も、日毎の糧を与えられ頂いている私たちは、その命のパンをそれぞれの周囲におられる方々と共に分かち合い、共に生かし生かされて参ります。